

寄稿論文（観光フォーラム）

和歌山大学観光学部創設 10 周年記念式典・祝賀会報告

Report - Faculty of tourism at Wakayama University, the 10th anniversary ceremony and celebration-

金岡 純代、尾久土 正己

Sumiyo Kanaoka, Masami Okyudo

和歌山大学観光学部

キーワード：イベントプロデュース、記念式典、観光学部

Key Words：Event produce, ceremony, faculty of tourism

I. はじめに

和歌山大学観光学部は、2007 年 4 月、経済学部観光学科を経て、2008 年 4 月に観光経営学科、地域再生学科の 2 学科からなる新学部として創設された。2017 年は観光学部の母体となった観光学科の設置から 10 年、また観光学部の設置から 10 年目の年に当たることから 10 周年を記念する式典・祝賀会を計画し、2017 年 5 月 28 日、ホテルグランヴィア和歌山において「和歌山大学観光学部創設 10 周年記念式典・祝賀会」（以降、10 周年記念式典）を挙行了。このような式典としては、2014 年 4 月 28 日に、「和歌山大学大学院観光学研究科博士課程設置記念式典・祝賀会」（以降、博士課程設置記念式典）を挙行しているが、この式典は研究科設置直後に大学本部の行事として行われたものであり、当時博士課程としての活動歴はなく、式典自体は今後の展開を期待するものであった。一方、今回の 10 周年記念式典は、国立大学唯一の観光学部ということでこの 10 年間多方面から非常に注目されてきた実績があり、多くの団体や個人の支援や協力のもと創り上げた教育研究やその結果として約 750 人の卒業生を社会に輩出したという歴史を持つての開催である。当然のことながら、式典の規模だけでなく、多方面からの多様な招待客の参加が予定されていた。さらに、本式典は学部の行事であり大学本部の支援が期待できず、このような対外的な式典行事はもちろんのこと、接客業務そのものに慣れていない学部教職員で運営せざるを得ない状況であった。接客に慣れているスタッフが運営する場合は、一人一人の業務に幅を持たせ、刻々と変わる状況に対して臨機応援に対応することができる。今回の式典では、スタッフの業務を、接客する個々の来賓をいくつかの区分に分類し、その動きを時間軸はもちろん、空間的にも明確にすることで、接客業務に慣れていないスタッフでも大規模な式典を挙行できるのではと考えた。

本報告では、本記念式典のほぼ 1 年をかけて行ってきた準

備過程と当日の状況についてその詳細を記録し、今回考え出した細かな分担体制がうまく機能したか振り返りたい。そのことが、今後の本学部の 20 周年の記念式典や、また他学部、他大学の同様イベントの参考になると考え、広く公開するものである。

II. 観光学部 10 周年記念事業委員会

2016 年 4 月 26 日、第 1 回観光学部 10 周年記念事業委員会が開催され、藤田武弘学部長以下、山田良治教授（前学部長）、尾久土正己教授（評議員）、大浦由美教授（編集委員会委員長）、木川剛志准教授（映像コンテンツ制作担当）、門田充浩室長（観光学部サポート室）、野田阿紀子事務補佐員（観光実践教育サポートオフィス）、金岡純代特任助手（関西観光教育コンソーシアム事務局、事業連携委員）8 名の委員が参加することになった。記念事業として①記念式典の開催、②記念誌の作成、③映像コンテンツの制作の 3 事業をそれぞれ担当し、準備に取り掛かった。以降式典までの間、同委員会は原則月 1 回で合計 17 回開催され、各担当が相互に進捗状況を確認し、意見交換を重ねて事業を進めていった。委員会は式典終了後 2 度招集され、合計 19 回開催された。なお、本報告の著者である金岡、尾久土は委員会の中で、記念事業の中心になる「①記念式典の開催」の担当者、責任者に指名されたことから、本報告を執筆することになった。

1. 記念式典の開催

記念事業委員会において、まず 10 周年記念式典の開催時期について検討を行った。学科設置から 10 年目となる 2016 年度の開催の意見も出たが、年度末にかけての準備期間を鑑み、「10 周年記念式典」として学部設置から 10 年目の 2017 年 5 月後半の週末に開催することに決定した。以下

記念式典の詳細はⅢ章以降に述べる。

2. 記念誌の作成

記念誌は、第1部「観光学部の10年」、第2部「卒業生が振り返る『観光学部の10年』」、および資料編の全80ページから構成されている。表紙は観光学部生がデザインし、委員会にて決定した。詳しくは『和歌山大学観光学部10周年記念誌』¹を参照いただきたい。記念誌は1000冊発行し、記念式典当日の出席者へ配布した。また後日、招待状リスト(Ⅲ章-1)のうち式典欠席団体(卒業生就職先企業を除く)、和歌山県内の高等学校および図書館、観光学部創設記念事業や基盤・観光学部事業の個人寄付者へ、学部10周年の挨拶状と共に郵送した。なお、記念誌の作成は大浦委員が責任者として企画、編集を行った。

3. 映像コンテンツの制作

記念式典のオープニング映像並びに祝賀会の360度パノラマ映像を制作し、式典出席者と観光学部の10年の歩みについて共有することができた。制作にあたっては、教職員の全員に協力を仰ぎ、学部創設当初からの写真や映像を収集した。なお、映像コンテンツの制作は木川委員が責任者としてサイモン・ワーン特任助教とともに担当した。

Ⅲ. 招待者リストの作成と送付

1. 送付先リストの作成

2014年4月28日に開催された「博士課程設置記念式典」の招待状送付先の実績を基に、以下の枠組の中で委員会にて精査検討し、式典招待状の送付先リストを作成した。

- ・和歌山大学関係者(観光学部)
 - 歴代観光学部長、歴代事務室長、アドバイザーボード、名誉教授、退職教員、非常勤講師(2016～2017年度)、
- ・和歌山大学関係者(観光学部以外)
 - 学長、役員(理事、監事)、経営協議会、他学部長、歴代学長(2007年以降)
- ・和歌山大学後援会、同窓会関連
 - 和歌山大学後援会(会長、副会長、顧問)、和歌山大学同窓会(会長、理事長、各学部同窓会長)、和歌山大学後援会観光支部(支部長、副支部長、監事)、和歌山大学観光学部同窓会(会長、副会長、理事、会計)
- ・他大学関係
 - 観光関連大学(全国)、関西観光教育コンソーシアム会員大学、高等教育機関コンソーシアム和歌山参加機関、関西圏の主要大学
- ・国会議員(和歌山選出)
- ・関係省庁
 - 文部科学省、観光庁、スポーツ庁、国連世界観光機関(UNWTO)アジア太平洋センター、日本政府観光局

(JNTO)

- ・和歌山県庁・関連機関、県内市町村
- ・県外LIP²関連自治体
- ・和歌山県内企業、報道機関
- ・観光関連報道機関、観光関連企業団体(関西観光教育コンソーシアム賛助会員など)
- ・卒業生就職先企業
 - すべての観光関連企業、および2名以上就職実績のある一般企業
- ・共同研究・寄付金など外部資金提供企業団体
- ・観光学部創設記念事業、基盤・観光学部事業への寄付団体

2. 招待状の送付

2017年2月、前述1のリスト約420か所に式典招待状を郵送した。返信用ハガキの切手代節約のため、出欠伺いの返信用ハガキは「料金受取人払郵便」扱いとし、式典参加者のみ「参加申込書」として返送を依頼する形式とした。参加申し込み期限は、準備の都合上3月15日に設定した。

尚、招待状送付先リストの他、観光学部卒業生30名の招待枠を設け、同窓会執行部に参加希望者の取りまとめを一任した。

Ⅳ. 会場選びと事前準備

2014年「博士課程設置記念式典」の実績から、約200名規模を想定した式典会場と交通アクセスを考慮し、和歌山市内の会場に打診した結果、2017年5月28日(日)ホテルグランヴィア和歌山6階ル・グラン会場にて開催することに決定した。2016年5月時点での会場探しであったが、同時期は株主総会シーズンと重なり既に候補会場は予約済みの状態であり、会場を確保できたのが唯一同日程・会場であった。

1. 式典、祝賀会プログラム

式典の基調講演は、学部創設時より包括協定を結んで多くの学生がフィールドワークを実施するなど学部との関係が深い長野県飯田市の牧野光朗市長に、司会進行は学部卒業生でテレビ愛知アナウンサーの岡田愛マリー氏に依頼した。

「観光学部らしさ」の演出として、記念式典にてオープニング映像の投影、祝賀会にて自主演習「日本文化研究なでしこ会」(以降、なでしこ会)による野点ふるまい並びに吹奏楽団による演奏、360度パノラマ映像の常時投影を行うこととした。

2. 会場レイアウト(図1)

式典、祝賀会会場のほか、特別来賓、司会者、吹奏楽団用の控室を3部屋準備した。吹奏楽団の控室は、吹奏楽団、なでしこ会、撮影の協力学生共用とし、サンドイッチとソフトドリ

ンクを用意した。

式典会場の座席配置は、前方3列を2名掛け来賓用座席、4列目以降を3名掛け一般座席とし、合計243席を用意した。祝賀会場には来賓テーブルを3か所準備し、来賓客が開宴時の立ち位置に困らないよう配慮した。映像投影コーナーおよび観光学部活動紹介パネル展示コーナーは図2、図3のように配置した。

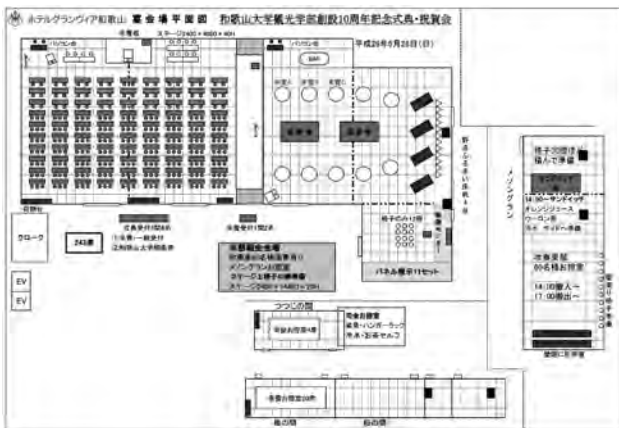


図1 会場レイアウト図（資料提供：ホテルグランヴィア和歌山）



図2 祝賀会場 映像投影コーナー



図3 祝賀会場 観光学部活動
紹介パネル展示コーナー
（写真撮影：和歌山大学観光学部）

3. 会場下見及び打ち合わせ

ホテルとの事前打ち合わせを以下の日程で行った。

4月3日（月）@ホテルグランヴィア和歌山

スタッフ顔合わせ、会場下見、式典座席・祝賀会テーブル配置など。

4月25日（火）@ホテルグランヴィア和歌山

「野点ふるまい」動線及び備品の確認、床几・金屏風の配置確認など。

5月18日（木）@本学 観光学部棟

掲示物等や当日の楽器搬入について確認。

5月25日（木）@ホテルグランヴィア和歌山

映像試写、祝電、会場レイアウト及び掲示物の最終確認。

4. 来賓対応について

招待客を特別来賓客と来賓客に区分し、以下の通り接遇対応を行った。

・特別来賓客（11名）

文部科学省、国会議員（代理出席を含む）³、知事、基調講演講師。

赤リボン（大）着用。ひな壇座席（基調講演中は最前列席）

・来賓客（29名）

文部科学省、市町村長・議会議長（代理出席を含む）、学校長など。

赤リボン（中）着用。会場前方2～3列目に座席札を配置。

特別来賓客1名につき教員1名を接遇担当とすることとした。特別来賓客はそれぞれ公務の関係上式典途中での入退場が予想されたため、関係先と綿密に連絡を取り可能な限り入退場のタイミングに関する詳細情報を事前に入手した。各接遇担当教員には入退場にあわせた待機位置と接遇内容を時間軸に沿って具体的に示し、対象とする特別来賓客の動向に即対応できるよう配慮した。

式典での来賓紹介順は、和歌山県組織、続いて和歌山県内の市町村順、他府県の市町村順でそれぞれ50音順、続いて教育機関（学校長出席校のみ）とした。

V. 当日状況

1. 参加者について

学外招待客120名、後援会・同窓会を含む大学関係者42名、報道関係者7名、観光学部教職員32名、吹奏楽団、なでしこ会、撮影協力の学生43名、総勢244名が参加した。

スタッフには教員・職員・学生別の名札を用意。特に教員用名札にはそれぞれの「研究分野」を記載し、学部の多彩な研究分野を紹介できるよう工夫した。ドレスコードについて藤

田学部長は略礼服、特別来賓担当者はスーツ、その他教職員はジャケット着用または和装とした。

2. 受付体制について

当日会場には図4の通り人員を配置した。受付は来賓と大学関係者に分け（図5）、それぞれスタッフが対応し、なでしこ会学生は来賓客への赤リボン着用などのサポートについた。また、来場者への祝電披露のため受付付近に掲示板を設置した（図6）。受付開始前にはスタッフ全員でブリーフィングを行い（図7）、時間軸に沿って各スタッフの担当役割を確認した。

特別来賓接客担当者はロビーで待機し、特別来賓客には受付を通らずに直接控室へ案内、来場状況を式典責任者に報告した。控室では式典開始まで大学役員が対応し、開始時刻に合わせて会場内座席までエスコートした。

受付付近の混雑を避けるため、エスカレーター付近ロビー、受付前にそれぞれ案内要員を配置した。また、ほぼ満席予定であったため、式典会場内にも誘導員を配置し、受付後に招待客がスムーズに着席できるよう工夫した。尚、運営スタッフ8名はトランシーバーを携帯し、タイムリーな連絡体制を整えた。

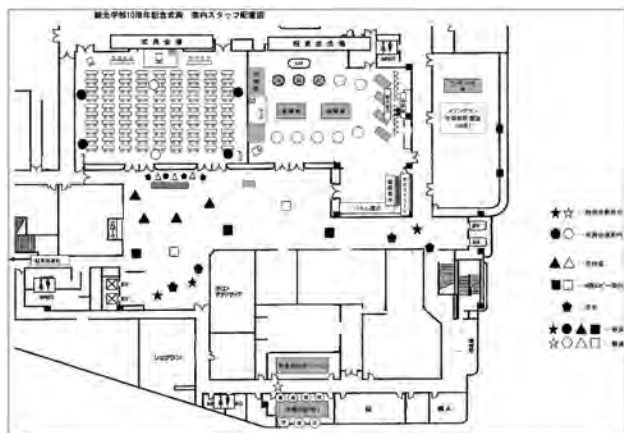


図4 人員配置図

（資料提供：ホテルグランヴィア和歌山、筆者注釈）

・来場者配布物

- ① 和歌山大学観光学部10周年記念誌
- ② 『ここからはじめる観光学』（本学関係者以外）
- ③ 学部紹介パンフレット（日・英）
- ④ 教員紹介パンフレット
- ⑤ 基調講演資料
- ⑥ 観光学部トートバッグ（希望者のみ）
- ⑦ 6時間駐車券（ホテルより提供。車での来場者のみ）

尚、来賓客には受付で配布せず、出席の御礼及び当日の案内用紙を添えて事前に会場内座席に配置した。



図5 記念式典受付



図6 祝電披露



図7 式典受付開始前スタッフブリーフィング



図8 式典会場

（撮影：和歌山大学観光学部）

3. 楽器運搬について

搬入経路が会場ロビーを通らざるを得なかったため、受付時の混雑を避け、式典開始後に控室に楽器搬入するよう事前に打ち合わせしていた。大学での積み込みからホテルでの搬入作業には教職員スタッフが立ち会い、不測の事態にも対応できるよう配慮した。祝賀会終了後も同様に、教職員が立ち会って大学までの運搬作業を見届けた。

4. 式典・祝賀会進行

事前の出席連絡がなかった特別来賓対応客が来場し、また別の出席予定者は到着しないなど、式典開始直前に慌てる場面もあったが、式典会場席札の作成及び並べ替え、司会へのシナリオ変更の伝達など、臨機応変で的確なスタッフの対応とチームワークにより、予定通り式典を挙行することができた。運営スタッフ用に用意したトランシーバーは式典途中で充電切れとなり、基調講演途中から使用不可となった。

祝賀会は吹奏楽団と山田良治教授による学歌演奏に始まり、野点ふるまいも好評のうちに進められた。しかし、後半のプログラムが押し迫ってしまったため、吹奏楽演奏後の歓談時間を削除し、中締めあいさつへと進めて閉会した。

VI. まとめ

今回の式典では、接客業務に慣れていない教職員チームで式典を挙行するに当たって、各スタッフの担当を来賓区分で分け、その上でその動きを時間と空間で細かく分けた。最後にこのことがうまく機能したかどうか振り返っておく。式典に沿って詳細な進行表を準備し、事前に運営スタッフで共有していたことで、式典が始まると特に各担当からの大きな問い合わせもなく、滞りなく運営できた。また、各教職員それぞれに式典当日の役割を分担したことで、観光学部教職員一同で招待客を迎えるという雰囲気が出た。特別来賓客に対しては1対1で接遇担当教員を決めていたので、式典責任者が各担当教員からの報告によって来賓客の来場状況をタイムリーに把握しやすくなり、事前連絡なしで来場した国会議員にも十分に対応することができた。今後も同様の式典における特別来賓対応については、スタッフの数をはじめ手厚い準備が肝要であると考ええる。

一方、式典日程が宿泊研修と重なったため一部の教員が参加できず、また学外者の参加を優先したことから、現役学生参加の視点を組み入れることができなかったのが反省点である。会場の収容人数や予算などの課題もあるが、この10年間の観光学部の研究活動の成果として、学部を支援してきた招待客（議員、行政、自治体、企業、教育機関、各種団体など）と現役学生との交流の場を設定することも今後検討する必要がある。またトランシーバーは式典前日にフル充電しておいたが、式典途中でバッテリー切れとなってしまった。今後は充電器を持参しておくなどのきめ細かい準備が必要で

ある。

式典開催日が近づき具体的な作業へと進むにつれ、招待状の送付先をはじめ、どこで線引きをして、どのような順番で執り行うか、細部にわたり1つずつ決定していかなければならない状況が続いた。その都度、学部長をはじめ諸先生方や本部、学部サポート室の助言・ご意見を仰ぎながら準備を進めてきた。本報告が、今後記念式典などを挙行する際に先行事例として少しでも役立てれば、と願っている。最後に、観光学部10周年記念事業委員会に委員として参加させていただいたことに感謝申し上げます。

【注】

- 1 和歌山大学観光学部10周年記念事業委員会（2017）『和歌山大学観光学部10周年記念誌』
- 2 LIPとは地域インターンシップ（Local Internship Program）の略称。詳しくは、<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/internship/lip/index.html> 参照。
- 3 和歌山選出国会議員8名のうち、本人出席5名、代理出席3名であった。